

## 【論 説】

# ソーシャル・ワーク実践過程への 情報処理とその意義

太 田 義 弘

1. はじめに
2. 研究の目的とその経過
3. 研究の理論的基礎
4. クライエント生活援助システム構想
5. 8 援助システム構造の特性
6. 実践過程への情報処理方法
7. おわりに

## 1. はじめに

社会福祉諸制度が、万全に整備され、ソーシャル・ワーカーが、あらゆる生活領域に配置され、他方では、それを支える福祉思想が、人びとの日常生活の中に広く浸透・定着したとしても、一人のクライエントが抱える生活上の諸問題が、自然に解消するわけではない。時代の変遷とともに、確かに、これらの社会福祉を維持する諸方策や理解が、改善・向上してきた事実は評価しなければならないが、しかし、これらは改めて認識するまでもなく、社会福祉を人間の生活の中に実現するための諸条件の整備に過ぎないということである。

それにまた、これらの問題を克服しようとする英知を結集した努力にもかかわらず、残念なことに、社会の進展に対応して、社会福祉問題そのものが、その兆候を変貌させてきている事実も否定できない。この世界に人間の生活が続く限り、その生活が問題を生み出し、そして、それと闘う努力をわれわれは歴史の中に積み重ね、またそれを継続していくかねばならない宿命を背負っている。問題解決を求め、他方では、新しい

問題を生み出しながら、生活それ自体の中に問題と共存してきたのが、人間の本当の姿でもある。

このような生活の営みへの対応策は、福祉思想の進展と、それを可能にした経済の高度成長に支えられて着実に前進をしてきたが、今や諸般の事由から、それらが曲がり角にきている。その差し迫った現実の一つは、いうまでもなく国家・社会の財政的逼迫が、何としてもわれわれに発想の転換を求めてきていることである。

厚生省は、昭和59年度版『厚生白書』にて、行政施策に対応して、一方では国民に、(1) 自立・自助活動の必要性、(2) 地域社会住民の相互扶助としてのボランティア精神の昂揚、さらに(3) 民間の活力などの活用<sup>(註1)</sup>に多大の期待を寄せてきている。これをめぐって、行政という為政者の立場への批判、つまり国民に自立の美名のもとに財政再建の付けをまわし、責任をとらせるとは何事かという反論があるのは、周知のごとくである。しかし、元来この視点はわれわれ自身が、つねに問いかけてきた課題そのものである。

クライエントの自助努力及びコミュニティ住民の理解や協力、民間の善意や活力に期待しようとしている発想の評価、つまり誰が、如何なる目的と手段によって、社会福祉を機能させようとしているのかという論争は、避けることにして、現実にはともかく、一つの方向が、切実に模索されてきている。さて、諸般の社会的状況を目の当たりにして、制度としての社会福祉諸施策へのアプローチの可能性と限界から、換言すれば、客体的な社会福祉を維持する条件整備への課題から、他方では、同時平行的に主体的な社会福祉を現実に享受できる人間づくりへの期待が、内外とも高まってきた。その動機や意図するところは少々異なるにしろ、その施策としてのアプローチへと視点が、拡大・移動してきたことも事実である。

すなわち、この視点は、本来制度としての社会福祉に対して、社会福祉をクライエントの生活の中に実現する実践的援助活動としてのソーシャル・ワークの必要性、不可欠性を改めて強調していることに他ならない。問題は、このアプローチをどのような方法で実現するかということである。それは馴れと善意、勘や経験などに基づいた活動からのみ成り立つことがらではなく、科学と専門性に裏付けられた合理性、人間と社

会を見る深遠な価値観、それに支えられた技法などに特徴を見出す専門職業としてのソーシャル・ワークそのものへの見識と、それのもつ専門的、科学的方法を駆使することに他ならない。だがしかし、われわれはソーシャル・ワーカーと称する意識や自覚をもち、それを具体化する主観的努力はしてきたものの十分な専門的、科学的手法に裏付けられた実践的方法をもってはこなかった。

以上のような問題意識と、それへのチャレンジを具体化しようと、この数年ソーシャル・ワーク実践のプロセス研究に焦点化した課題を設定し、それへのアプローチを継続してきた。本稿は、実践過程システムの中でもクライエント援助を中心にした活動への研究経過を簡略に紹介し、実践方法の科学化へ向けての理論と先端技術の活用と展開を、具体化しようとする試みをまとめたものである。

## 2. 研究の目的とその経過

このところ数年にわたって継続してきた本研究の目的の行きつく先は、他でもないコンピュータ技術をソーシャル・ワーク実践に導入して、その科学的専門化を前進させようという試みである。

しかしそこには、次章で概括するような遠大な基礎理論が、必要である。それは現実の社会に生活するクライエントと、その環境構造を統合的にとらえつつ、それが機能する生態をプロセスとして分析し、把握していくかねばならない。人間の生活という生態的実体を、価値や生ざま、客観的指標を含めて的確に理解することは、至難のわざである。生態という統合的概念を、いくら正確なものとはいえ部分から構成される構造概念で分析し、その統合関係を機能として追求したとしても、それはその実体に近似したものを探求することにはなるが、決して実体そのものを掌握することにはならない。ここはもはや科学方法論の問題ではなく、哲学の課題である。

このような認識に立脚しながら、人間の生活という生態的実体にいくらかでも迫ろうとする試みが、システム的発想である。システム概念をさらに緻密に、もう一步前進させた素粒子理論が、やがて社会科学の世界でも展開される可能性があるとの予見もあるが、目下のところ最善の

理論であると考えられるのが、このシステム理論である。

さて、1979年度の第27回日本社会福祉学会大会以来取り組んできた本研究をめぐる一連の課題<sup>(#2)</sup>と、その後、逐次発表してきた論文及び文献<sup>(#3)</sup>を通じて断片的にまとめてきた課題を、本論考の中で一段落させたいと願っている。つまりクライエント・システムを中心としたソーシャル・ワーク実践としての援助過程研究のまとめをすることである。しかしながらまだ、実践活動システム、行政システム、政策策定システムなど上位システムに向けての研究課題は山積している。

そこで今一度、継続研究として逐次、断片的に報告・発表してきた本研究の目的を改めて確認しておかなければならぬ。それらは次のような課題である。

- (1) システム的発想によるソーシャル・ワーク概念の再検討
- (2) 過程展開としてのソーシャル・ワーク実践概念の定立
- (3) システム概念の展開を通じたソーシャル・ワーク実践方法の科学的定式化
- (4) ソーシャル・ワーク実践へのコンピュータ技術の導入
- (5) ソーシャル・ワーク実践活動としてのクライエントの生活援助システムの展開
- (6) 生活援助システムにおける情報の処理方法
- (7) 生活援助システムのシミュレーション・モデルの確立
- (8) ソーシャル・ワーク実践過程への情報の処理と提供及びアセスメント

などが、それである。

まず第一の課題は、社会福祉とソーシャル・ワーク概念の混乱が、それらの第一義的役割である実践現場での援助活動の専門化を低迷させてきたことへの反省を出発点に、システム的発想を用いることによって、その本来の構造や機能を峻別すると同時に、両者のシステム的統合関係を明確にしてきたつもりである<sup>(#4)</sup>。

第二に、ソーシャル・ワークという実践概念の現実的理解は、その特性が発現する場面を追跡すること以外に適切な方法はないところから、実践とは、それが展開されるプロセスを研究することである。プロセスとは、システム概念を演繹すると、構造と構造が不可分の結合関係を維

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

持することから、そこに出現する結果としての機能の時系列変容を意味する。つまり構造、機能とそれらの変容からなる統合概念である。これによって実践概念の実体を、プロセスとして科学的に把握することが可能になる。実践とは、プロセスであるという視点、すでに再三強調してきたところである<sup>(註5)</sup>。

このプロセスという発想を、システム概念で展開することにより、第一の課題である社会福祉とソーシャル・ワークの関係も、統合的に把握することが可能である。

第三は、ソーシャル・ワーク実践方法の科学的定式化であるが、当然のことながら実践現場でもっとも鶴首している積年の課題である。この切実な動向は、1940年代から米国でケースワークの効果測定として出現をしてくる。個々のクライエントへの対応状況を計数化し、科学的に評価しようとするさまざまな試みがそれである。詳細な評価項目は、実践方法の具体的な内容を意味しており、方法の科学的定式化への発端にはなったが、次々と批判に応えて改良された方法が開発されるにもかかわらず、その定式化や専門化が思うように前進してはこなかった。評価する基本的構造への疑問、生態評価の困難性、評価の客観性、手順の煩雑さ、その実用性などへの疑問や批判から、その研究は、大きな期待を背にしながらも、このところいきさか萎縮してきた感がしないわけでもない。

しかし、時代は進展し、クライエント理解に対する視点も生活モデルのような生態的の理解が一般化し、人と環境を統合的に把握するシステム的発想が台頭するに及び、新しい展望が開けつつある。それに加えて、方法の定式化への展望を具体化してくれるのが、何といってもコンピュータ技術の発達である。

第四が、そのコンピュータ技術のソーシャル・ワーク実践への導入である。泥臭い勘と経験が頼りであった世界に、即座に科学技術の最先端をいく手法の導入が、どのように馴染むか疑問も多い。しかし誤解があってはならないが、コンピュータが、ソーシャル・ワーカーに代って実践機能を果すわけではない。思索し、操作し、試行することを通じ実践活動を展開するのは、ソーシャル・ワーカーであり、そこに主体的に参加するクライエントの働きそのものである。コンピュータは、その活動への必要な情報の提供とその処理を効率的にする科学的手段にすぎない。

そして、その情報をどのように適正にアセスメントし、実践の中に具体的に活用していくかは、ソーシャル・ワーカーの専門性以外のなものでもない。したがって、ここでの課題は、一つに情報処理の前提になる生活援助システムを如何に構想するかということと、もう一つは、それを具体化した情報処理プログラムを如何に作成するかという課題である。これはソーシャル・ワークの思想や発想、概念を具体化する作業でもある。

第五が、本研究の中心的課題である実践の前提になるシステム概念の実践的理論化作業である。理論的構想は、次章で解説するが、ソーシャル・ワーク実践をめぐる四大構成要素のシステム関係から、つづいて実践の制度的構造のシステム関係をプロセスの二面性として考察、その一つ、援助プロセスを、さらにクライエント・システムに焦点化して、8援助構造—32構成指標内容—128因子データからなるクライエント生活援助システムとして構成している。

クライエントとその生活状況に焦点をあてながら、システム的発想に基づいて、生活援助を目的に、援助プロセスの展開をしようとするものである。したがって、クライエントをめぐる社会学的な生活の構造や機能の分析が目的ではない。生活援助というソーシャル・ワーク実践の目標にしたがって、クライエントとその生活を実践的に構造・機能・変容のシステム的視点から把握しようとしている。

第六に、理論的に構想したクライエント生活援助システムは、現実的にどのような機能を果していくのかという課題であるが、それはプロセス概念をさらに詳細に展開したプロセスの局面展開概念にしたがって、位置づけられて機能していく。まずその一つは、インテークを経たアセスメント・プロセスに情報処理の成果を提供することであり、つづいて実践展開のプランニングからインターベンションへの情報の処理と提供、そして最終的には、終結にいたる評価のために情報処理の成果が活用されていく。このような目的で、それぞれのプロセスに対応した援助を開するため、必要な専門的判断を可能にする情報の適切な処理と提供が、大きな意味をもち、ここにソーシャル・ワーク実践のための情報処理モデルとしてのコンピュータ・プログラムが、必要となってくる。

第七の課題は、その情報処理モデルをどのようにプログラムとして構

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

成するかということになるが、そこでシミュレーション・プログラム構想を展開することになる。ソーシャル・ワーク実践プロセスをシステムとして理解しようと試みてきたわけであるが、そのシステムを構成する個々の因子のもつ特性を、上位システムである構成指標や、さらに援助構造に向けて、調査に基づく固有の独特な方法で、いわば収斂したものである。しかし、それは下位システムの特性を、上位システムへと単に総合したようなものではない。上位システムの特性を、幾らかでも分有する因子データを総て、その特徴に応じてウェイトづけをし、システムとして収斂したものが、この生活援助システムのシミュレーション・モデルと呼んでいるプログラムである。

そして最後に、第八が、そのシミュレーション・モデルを活用した情報処理結果のもたらす意義についてである。後述するごとく、このシミュレーション・モデルは、プログラムに因子データを入力することによって、以降は、必要なクライエント援助をめぐるシステム状況が、係数として自動的に算出・表示される。これらの情報処理結果のもたらす意義をまとめると、次のようになる。

- (1) 実践的視点からクライエントをめぐる生活構造の統合的全体性、つまりシステム状況が一覧できる。
- (2) クライエントの固有な状況としての基礎構造と、援助方策や活動の実態としての実践構造とのシステム的比較考察が、容易に可能である。
- (3) 実践構成要素間のシステム状況、そのウェイトや均衡状態、その特徴や問題が、一目瞭然である。
- (4) 生活援助システムとしての8援助構造間相互の相違、偏り、問題、特徴などを、その下位システムである構成内容を基礎に、全体的あるいは部分的にシステム考察をすることが可能である。
- (5) これらから、ソーシャル・ワーク実践にとっての障害や問題、実践計画やインターベンションの可能性が、容易にアセスメントできる。
- (6) 実践プロセスの局面展開に対応したアプローチと、その方向を決定するのに、必要な情報を十分に得ることができる。

以上のような八点にわたる目的と、それを追求するためのさらなる目

標を逐次設定しながら、継続した考察を、このような経過と順序を経て展開し、積み上げてきた。

### 3. 研究の理論的基礎

指摘してきたように、ここで本研究の目的の一部である基礎理論を、概説しておかねばならない。それらは

- (1) システム的発想の展開
- (2) プロセスとしての実践概念
- (3) システム的発想とプロセス概念に基づくクライエント生活援助システム
- (4) 方法としての情報処理シミュレーションとその活用

をめぐる理論と、それらを具体化した概念から成り立っている。

このような理論の定立を考察することから具体的研究に着手するには、大きな理由があるといわねばならない。すでに折りあるごとに強調してきたところでもあるが、社会福祉とソーシャル・ワーク概念の曖昧さをめぐって出現していく問題からである。

社会福祉とは、厳密には社会福祉諸制度のシステムを意味するが、それは、きわめて実践的な特性に支えられた活動を前提にした援助方策である。ところが、制度としての社会福祉と実践活動としてのソーシャル・ワークの関係が、明確にされないまま渾然一体となって実践特性が、問題にされてきたために、実践をめぐる科学性・専門性の課題についても、処遇技術が焦点であったり、それを支える組織や制度、あるいは運動の問題であったりしてきた。

ソーシャル・ワークは、社会福祉を機能させる実践活動であるという理解と、実践をめぐる科学的研究とは、ソーシャル・ワーク実践そのものの研究であるという共通認識が、いくらか見られるようになってきた。そして、そこでの研究の焦点は、再三指摘してきたようにプロセス研究に代表されるということになるであろう。

この文脈から、一般的に実践的課題としてとらえられる歴史的研究の辿ってきた経過は、まず初期段階においては、(1) 実践技術に中心が置かれ、つづいて、(2) 技術が効力を發揮する方法に关心がよせられ、そして

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

次第に(3) クライエントを中心とした変容、成長と遭遇過程に焦点が置かれるようになってきている。さらに今後は、(4) プロセス研究の成果が、援助システムを通じて実践機関、行政機関、地方自治体、国家・社会レベルへとフィードバックされていくことであろう。そして、社会福祉諸制度の改善・拡充へと、いわば間接的援助プロセスの整備に結実され、それはさらにフィードバックされて、専門的実践活動としての援助プロセスを飛躍的に前進させることになるであろう。

さて、その期待を具体化するためには、システム的発想から実践プロセス概念、クライエント生活援助システム構想、そして情報処理シミュレーション理論の活用と展開が必要である。シミュレーション・モデル以外の理論や概念、構想は、すでに前述の学会報告や北星論集などにて発表してきたところであるが、ここでは、特に本研究の理論的基礎としてのシステム概念とプロセス概念について、その概要をまとめておきたい。

### (1) システム的発想

システム理論の系譜や、そのソーシャル・ワークへの導入の経緯は、先の小論<sup>(注6)</sup>にて解説をしてきたところであるが、その理論の本質は、ある実体の生態的な統合的全体状況を理解する説明概念である。もちろんそこには画期的な思考方法が、示唆されているのであるが、これをソーシャル・ワーク実践の場面で、十分咀嚼して実践概念として展開している研究には、狭い筆者の視野からまだ遭遇していない。

しかし、近年家族療法の分野で、システムズ・アプローチとして、多様な実践方法が、展開されるようになってきている。精神医学者ジェームズ・ミラー J.G. Miller による一般システム理論の原理を摂取した一般生活体システム理論の出現を契機にして、家族という不可分の生活の単位を対象にした療法に、システム的発想の影響が、多分に台頭していくようになった。そして、これらの実践例には、ソーシャル・ワーク実践に示唆深いものが非常に多い。

特に、家族の『システム構造』に焦点化して、その再編成を志向しているミニユーチン S. Minuchin の家族構造療法<sup>(注7)</sup>、家族関係へのアプローチを、精神生活過程の歴史からシステム的『進化』としてとらえようとしているボーエン M. Bowen の家族療法<sup>(注8)</sup>、さらに MRI (Mental

Research Institute)のコミュニケーション・アプローチでは、家族システムの「機能」に焦点をあて、家族員の行動理解をしようとしている<sup>(注9)</sup>ことなど、きわめて実践への示唆に富んだ方法が展開されている。

本研究の基礎になるシステムについての概念は、これらの思考方法や処遇方法より示唆を受けたもので、システム理論というよりは、システム的発想と呼ぶべきものである。システムとは、ある実体を把握するために、それを構成している秩序立った要素の結合がもたらす独特な働きからなる統合概念である。この理念を実践概念として具体化するために、前述の家族療法の特徴に見られるようなシステム概念の三特性を、システムの三大基本的要素と考え、(1) 構造、(2) 機能、(3) 変容(過程)との概念に形式的に分解して考察することが有効である。システムとは、それらの独特な均衡関係からなる統合的全体性を意味している<sup>(注10)</sup>。

したがって、実践概念としてのシステム的発想を、クライエントの生活援助を目標としたシステムに適応することによって、ソーシャル・ワーク実践活動をシステム的視点からとらえることが可能である。

このシステム的発想を用いたソーシャル・ワーク実践概念の解説では、実践を構成する要素としての価値・知識・方策・実践方法とを、四大構成要素の構造として分類し、その機能を考察するために結合関係を図式化して、構成要素のコンステレーション図<sup>(注11)</sup>を展開してみた。この概念をそのまま実践場面に移し変えたものが、後述するクライエント生活援助システム構造である。

これらは構造と機能という二元的なシステム特性の考察にすぎないが、さらに、このシステム関係の時系列変容、つまり構造と機能の変化を考察することによって、ソーシャル・ワーク実践へのシステム的発想の三特性を具体化しようとしている。

## (2) プロセスとしての実践概念

ソーシャル・ワーク実践は、そのプロセスに中心的意義があると再三主張してきたが、システムの三特性の一つ、変容(過程)とは、システム特性の時系列変容を基本的にいうわけである。それに対してプロセスとは、ソーシャル・ワーク実践を科学的、専門的に展開する方法に基づき、クライエント援助を目標にした成長・変容を可能にする過程である。したがって、それは単なる変容過程ではなく、変容を効果的に引き出そ

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

うとする特殊な専門的過程であり、目標を目指したシステム関係の時系列変容であるといわねばならない。そこにプロセスが、局面を追って意図的に展開されなければならない深い意味がある。

プロセス展開としてのソーシャル・ワーク実践を、現実の社会制度に対応させ、そのシステム関係について分析してみると、政策策定・行政・実践活動・クライエントという制度的構造をもつ、四システムから構成されていることがわかる。このマクロからミクロへの流れを、「援助過程」と分類し<sup>(注12)</sup>、この逆循環、即ちミクロからマクロへのプロセス循環を、「実践・政策調整過程」と分類してきた<sup>(注13)</sup>。クライエントの現実を直視することから、実践方法、行政、制度・政策などを再検討するプロセスである。これらのシステム関係の二面性を図式化したものが、実践の制度的構造のシステム関係図<sup>(注14)</sup>である。そして、そのプロセスは、相互にフィードバックされて循環しながらシステムとして機能していくと考えられる。

ソーシャル・ワーク実践とは、クライエント援助を通じて、独立した社会生活の回復を可能にしようとするプロセス行動である。その目的を遂行するために、制度としての社会福祉、つまりハード・アプローチをどのように活性化させ、開発していくことが可能なのか。そして他方では、クライエント自身への援助を如何に有効に展開することが可能なのかを重要な課題にしている。このソフト・アプローチを主にソーシャル・ワークと呼んできたわけであるが、過程としての実践活動とは、本来その二側面をプロセスに内包していかなければならない。実践活動にシステム概念を導入することによって、はじめてソーシャル・ワーク実践過程として、これらを統合的に理解することが可能になる。

このような二面性をもつプロセス概念は、その展開過程において、ソーシャル・ワーカーによる実践活動としてのプロセス展開を通じ、さらに、システム内部で五段階の局面<sup>(注15)</sup>からなる専門的なプロセス展開をしながら、システム関係を進展させていく。実践とは、生活援助システムを構成する必要な情報を収集・処理し、それらを活用して如何に過程を科学的に把握し、展開するかを考察することに他ならない。

#### 4. クライエント生活援助システム構想

さて次に、システム的発想に基づいたプロセス概念を、クライエントへの生活援助というソーシャル・ワーク実践目標に向けて、具体化しなければならない。そこで『クライエント生活援助システム』という構想が、必要になってくる。

この概念は、次のような目的と特徴から構成されている。

- (1) システム的発想に基づくプロセス展開を通じて、クライエント援助である実践を実体として適切に把握しようとすること、
- (2) クライエントの生活を中心とした人と環境の生態的システム把握が、可能になること、
- (3) クライエント生活援助システムという実体の統合的全体性を、構造・指標・因子を通じて具体化できること、
- (4) 実践活動という実体の特性を、考察可能な多元的範疇で構造化していること、
- (5) 指標・因子についても、実体の特性考察に合致するような構造化が、可能であること、
- (6) クライエント援助を目標としたシステム的情報処理の方法であること

などがそれである。

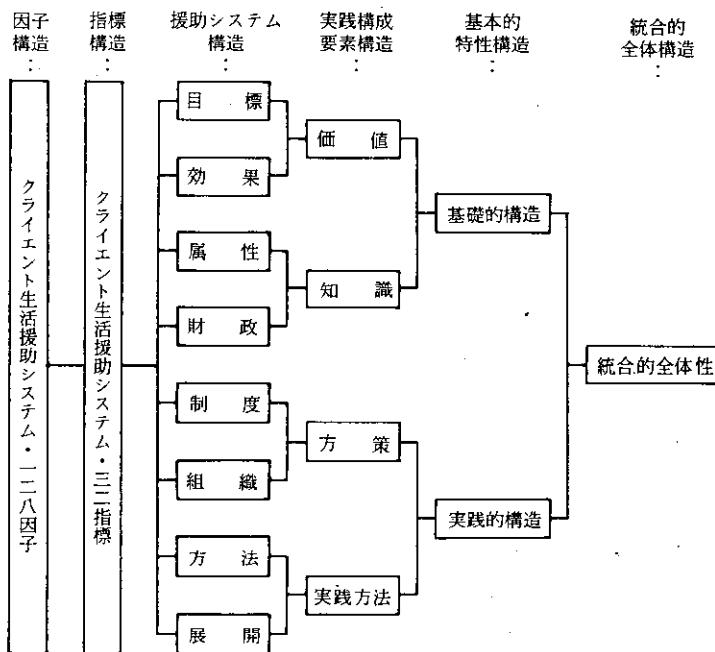
まず第一に、この発想は、生活という生態的実体に、現実的に接近しようとすることで、生活を理論的範疇から構造的に分析・把握しようとする生活構造論ではない。むしろ、実践に有効な生活をめぐる現実的な情報の提供をしようとする基本的視点をもっている。

第二は、クライエントの生活に焦点化して、広がりと生きざま、その流れを、システム的発想で現実的にとらえようとしていることである。

第三は、クライエントの生活を援助するという目標にしたがって、そのためのシステム関係を全体像として構成したものである。これは6段階をなす階層からシステムとして構成されている。まず最初は、128因子からなる因子構造、それらを32指標に分類した第2段階の指標構造、それはさらに8システム構造に分類・統合されて、第3段階の援助システ

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

クライエント生活援助システムと構造とその階層性



第一図

ム構造を形成している。これらの三つの段階からなるシステム階層は、主としてクライエントの生活実体の実践的構造化をしたものである。

つづいてこれらは、第4段階の実践活動への情報として分類・統合され、4要素からなる実践構成要素構造を形成する。それらは、さらにまた、第5段階の2特性からなる実践の基本的特性構造へと統合されて、実践特性をシステム的に表現する。そして最終的には、第6段階の統合的全体構造へと収斂していく。これらのクライエント生活援助システムの構造と階層性は、第一図のごとくである。この図は、単にシステムの構造とその階層性を示すに過ぎないが、クライエント生活援助システムの意義は、構造と同時に、その機能や変容状況が、一覧できるところ

にある。もちろんそれは、この図の根底にある発想を、コンピュータによるシミュレーション・プログラムで情報処理することによって、はじめて可能になることである。

第四に、このクライエントをめぐるシステム的発想の中心点は、システム階層の第3段階である援助システム構造のとらえ方にあるといつてもよい。つまり、8システム構造分類の方法にある。しかしながら同時に、生活構造論のような生活のあらゆる要素を一つの範疇で統一的にとらえ考察する構造・機能分析などの立場から、疑問や批判が惹起するのもこの点であると予測される。

そこで、この思考方法の特徴を指摘しておかねばならない。このような発想をとる理由は、生活援助を目標にした実践活動という実体の特性を、理論的にというよりは、むしろ可能な限り、その現実に則して実践的に把握したいからである。そしてそれが、具体的な実践展開への貴重な情報となるからである。

さてその特徴とは、クライエントの生活をめぐる援助システムを、実体の特性がよりよく表出されるようにと、多元的範疇で構造化しているところにある。つまり、8システム構造分類の基礎は、個体的特性から、静的、動的、関係的、価値的特性まで、さまざまな視点を統合して、多元的にシステムを構造化している。それらの構造分類と構成内容は、第一表のごとくである。

次に第五が、その8システム構造の個々の内容についてである。各システム構造は、その特徴をもっともよく反映すると考えられる4指標で構成されているが、その分類配列の論理は、次のような順序で構成されている。空間の順序、例えば中心から周辺へ、遠近やその逆など、つづいて時間の順序、重要度、興味・関心、理解度、全体・部分、原因・結果などの順序、あるいは実体の要素などから成り立っている。したがって、この論理も一貫した分類基準に適合させた構成内容の類型化ではなく、各構造のもつ実体を、可能な限り敷衍して、把握しようとする多元的発想で構造化されている。

さらに、それらを構成する因子についても、これと同様の発想で、その各指標の特性をもっともよく具現できる4因子でもって構造化している。そして、これらの因子の内容については、第二表に一例（1. 目標

クライエント生活援助システム 構成とその内容	
(1) 目標 (生活態度)	(3) 属性 (基礎的特性)
(A) 習慣・信条	(A) 個別の特性
1 礼儀	1 年齢と生活状況
2 生活規律の遵守	2 性別と生活状況
3 社会志向の強さ	3 婚姻
4 宗教性	4 教育の程度
(B) 慣習・文化	(B) パーソナリティ
1 家族意識	1 知的機能
2 義理・人情	2 情緒的機能
3 改善志向	3 社会的機能
4 理想志向	4 特徴的傾向
(C) 自己意識	(C) 心身の健康
1 人生の目標	1 心理・精神的健康状態
2 自己中心性	2 身体的健康状態
3 自律意識	3 家族の心理・精神的健康状態
4 自己覚知	4 家族の身体的健康状態
(D) 社会意識	(D) 問題の概要
1 社会観	1 問題の程度
2 他人への配慮	2 問題の性質
3 社会参加の度合	3 問題の起源
4 投射意識	4 問題の経過
(2) 効果 (援助効果)	(4) 財政 (生計の基礎的条件)
(A) クライエントの変容	(A) 収入と支出の状況
1 問題理解	1 収入の程度
2 自己理解	2 収入改善の可能性
3 共感理解	3 生計の維持
4 問題状況の改善	4 生計の計画性
(B) 家族の変容	(B) 経済感覚と斧削
1 家族による問題理解	1 金銭や物品の消費感覚
2 要素による家庭理解	2 ローン志向性
3 家族による環境理解	3 貯蓄状況
4 家族としての問題状況の改善	4 経済生活の見通し
(C) 援助機関の機能	(C) 職業・家庭内の地位
1 提携の適正化	1 職業の有無
2 援助の効率化	2 職業への意識
3 援助方法の整備	3 家庭内の立場
4 援助施策への評価	4 家庭内での役割
(D) 社会資源ネットワーク	(D) 生活状況
1 社会資源ネットワークの連携	1 世帯の規模
2 社会資源ネットワークの有効性	2 生計の責任
3 社会資源ネットワークの広さ	3 住居の状況
4 社会資源ネットワーク拡大の可能性	4 居住地区的利便
(5) 制度 (社会資源状況)	
(A) 生活の基礎的条件	
1 公的扶助・年金・手当等の受給	
2 制度的援助改善の可能性	
3 生活財團の展望	
4 状況改善の可能性	
(B) 自己資源の状況	
1 社会的自立性改善の可能性	
2 特殊的能力や技能	
3 趣味や余暇の状況	
4 集団・組織団体への参加	
(C) 援助機関の状況	
1 適切な援助機関の有無	
2 援助機関との距離	
3 援助機関の利用	
4 援助機関の受け入れ	
(D) 行政施策	
1 援助機関の適切な地域的配置	
2 特定の地方行政政策の有無	
3 特定な制度の有無	
4 住民大衆の理解	
(E) 組織 (社会生活関係)	
(A) 家族関係	
1 家族の零剪気	
2 家族の協力	
3 家族の形態	
4 家族の人間関係	
(B) 友人・近隣 (学校・職場等) 関係	
1 友人・近隣との零剪気	
2 友人の協力	
3 友人・近隣との交流	
4 友人・近隣のもつ社会資源	
(C) ソーシャルワーカーへの接近日	
1 ソーシャル・ワーカーの理解	
2 ソーシャル・ワーカーへの接近日	
3 ソーシャル・ワーカーの活用	
4 ソーシャル・ワーカーとの協働	
(D) 援助機関の組織的環境	
1 援助機関の人びとの零剪気	
2 援助機関の人びとの理解と協力	
3 援助機関の人びとの交流	
4 援助機関の人びとのもつ社会資源	
(7) 方法 (課題解決方法)	
(A) クライエントの問題解決方策	
1 問題意識の有無	
2 問題解決意欲	
3 問題解決方法の工夫	
4 問題解決方策の有無	
(B) 家族の問題解決方策	
1 問題意識の有無	
2 クライエントへの接近日	
3 問題解決方法の工夫	
4 問題の解決援助方策	
(C) ソーシャル・ワーカー	
1 ソーシャル・ワーカーの配置	
2 機関的援助の可能性	
3 ティーム・アプローチの可能性	
4 人的資源活用・開発の可能性	
(D) 援助施策	
1 機関の援助姿勢	
2 援助機関固有の制度的施策	
3 援助プログラムの有無と開発	
4 他機関との協同プログラムの展開	
(E) 展開 (方法展開の評価)	
(A) 課題の解決活動状況	
1 課題の設定	
2 課題追求の計画	
3 課題意識にもとづく行動	
4 課題追求の継続	
(B) 家族の協力状況	
1 ソーシャル・ワーカー援助への理解	
2 ソーシャル・ワーカー援助プログラムへの参加	
3 関連組織団体活動への参加と協力	
4 家族ぐるみでの課題追求活動	
(C) ソーシャル・ワーカーの活動状況	
1 クライエントとの接触	
2 家族への接近日	
3 援助方法の工夫	
4 援助機関への働きかけ	
(D) 援助施策の展開状況	
1 社会資源への理解と关心	
2 社会資源の活用	
3 社会資源の改善充実への关心	
4 社会資源の限界と可能性の理解	

第一表

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

No.	氏名	男・女	歳	職業・身分	機関名	分野	地区	担当	198年月日記入
-----	----	-----	---	-------	-----	----	----	----	----------

No.1

No.2

### (1) 目標（生活態度） A

### (1) 目標（生活態度） B

#### (A) 価値・標準

##### 1. 礼儀

- ( ) 1) まったく礼儀・作法ができるない
- ( ) 2) あまり礼儀・作法ができるない
- ( ) 3) なんとか必要最低限の礼儀・作法はわかっている
- ( ) 4) 比較的礼儀・作法をわきまえている
- ( ) 5) とてもよく礼儀・作法をわきまえている

##### 2. 生活規律の遵守

- ( ) 1) まったく生活規律を守らず無視する
- ( ) 2) あまり生活規律を守らない
- ( ) 3) なんとか必要最低限の生活規律は守っている
- ( ) 4) 比較的生活規律を守っている
- ( ) 5) とてもよく生活規律を守っている

##### 3. 社会志向の強さ

- ( ) 1) まったく社会に対して無関心である
- ( ) 2) あまり社会に対して関心がない
- ( ) 3) なんとか一応社会に対して関心はもっている
- ( ) 4) 比較的社会に対して関心をもっている
- ( ) 5) とても社会に対して強い関心をもっている

##### 4. 宗教性：信仰や宗教的行事に対する関心

- ( ) 1) まったく無関心である
- ( ) 2) あまり関心がない
- ( ) 3) 一応家の宗教的行事には参加する
- ( ) 4) 北欧的関心があるが特定の信仰をもっている
- ( ) 5) とても信仰に熱く宗教活動にも参加している

#### (B) 情報・文化

##### 1. 家族意識

- ( ) 1) まったく家や家族のことを考えていない
- ( ) 2) あまり家や家族のことを考えていない
- ( ) 3) 一応の家や家族のことは気にしている
- ( ) 4) 比較的家や家族のことを考えている
- ( ) 5) とてもよく家や家族のことを考えている

##### 2. 義理・人情

- ( ) 1) まったく義理・人情に欠ける
- ( ) 2) あまり義理・人情を気にしない
- ( ) 3) なんとか常識程度の義理・人情はもっている
- ( ) 4) 比較的義理・人情に厚い
- ( ) 5) とても義理・人情を大切にしている

##### 3. 改革志向：現状改善への意欲

- ( ) 1) まったく現状に埋没するほうである
- ( ) 2) あまり現状から離脱しようがないほうである
- ( ) 3) などとか現状に改革しなければと思っている
- ( ) 4) 比較的現状改収への意欲はもっている
- ( ) 5) とても現状改収への意欲をもっている

##### 4. 理想志向：現実から将来へ向かっての姿勢

- ( ) 1) まったく現実的思考しかできない
- ( ) 2) あまり現実を離れた思考をできない
- ( ) 3) なんか理想をもちたいと思っている
- ( ) 4) 比較的理想的をもちそれを実現しようとしている
- ( ) 5) とても高い理想的をもちそれを実現しようと努力している

No.3

No.4

### (1) 目標（生活態度） C

### (1) 目標（生活態度） D

#### (C) 自己意識

##### 1. 人生の目標：人生の目標とする生活態度

- ( ) 1) まったく目標をもっていない
- ( ) 2) あまり目標のよのなものをもっていない
- ( ) 3) なんとか目標を求めるようとしている
- ( ) 4) 比較的目標をもっている
- ( ) 5) とても具体的な目標をもっている

##### 2. 自己中心性：自己中心的態度

- ( ) 1) まったく利己的な自己中心的態度を示している
- ( ) 2) かなり自己中心的態度を示している
- ( ) 3) なんとか自己中心的態度を改めなければならないと思っている
- ( ) 4) 比較的自己中心的態度を抑制している
- ( ) 5) とても他者への配慮をしながら自己中心的態度を抑制・調和させている

##### 3. 自律意識：自己・主体的態度

- ( ) 1) まったく自律的態度をもっていない
- ( ) 2) あまり自律的態度をもっていない
- ( ) 3) なんとか自律的な意識をもとうとしている
- ( ) 4) 比較的自律的な態度や行動を示している
- ( ) 5) とてもよく自律的な態度や行動を示している

##### 4. 自己覚知：環境や問題を通じた自己への客観視

- ( ) 1) まったくそのような姿勢がない
- ( ) 2) あまりそのような姿勢がない
- ( ) 3) なんとかそのような姿勢を示している
- ( ) 4) 比較的よくそのような姿勢を示している
- ( ) 5) とてもよくそのような姿勢のとちに自己を客観視している

#### (D) 社会意識

##### 1. 社会観：世の中に対する自己の価値観

- ( ) 1) まったく社会観をもっていない
- ( ) 2) あまり社会観のよのなものをもっていない
- ( ) 3) などとか社会観のよのなものをもとうとしている
- ( ) 4) 比較的明確な社会観をもっている
- ( ) 5) とても明確で具体的な社会観をもっている

##### 2. 他者への配慮：他者中心的態度

- ( ) 1) まったくそのような態度をもっていない
- ( ) 2) あまりそのような態度をもっていない
- ( ) 3) いらかそのような態度を気にしている
- ( ) 4) 比較的他者への思いやりがある
- ( ) 5) とてもよく他者への思いやりを大切にしている

##### 3. 社会参加の度合：他者との協同活動

- ( ) 1) まったく参加しない
- ( ) 2) あまり参加しない
- ( ) 3) などとか付き合い程度に最低限参加している
- ( ) 4) 比較的よく参加している
- ( ) 5) とてもよく積極的に参加している

##### 4. 役割意識：社会参加への責任意識

- ( ) 1) まったく責任を果さうとする意識はない
- ( ) 2) あまり責任を果さうとする意識はない
- ( ) 3) いくらか責任を感じている
- ( ) 4) 比較的適切な役割を果している
- ( ) 5) とてもよく必要な役割を適切に果してしている

第二表

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

構造における、A—職業・信条及びB—慣習・文化の2指標、それを構成する各因子内容と、データとして収集する項目内容)を掲載しておいたので、それを参照願いたい。このような構造化は、単なる説明概念、あるいは理論のための理論ではなく、実践に有効・適切な貢献をしたいというシステム的発想のもつ特性の展開に他ならない。

そして第六に、再三指摘してきたごとく、この発想の基本は、科学的な情報処理過程を通じて、ソーシャル・ワーク実践展開に不可欠な正確かつ適正なデータを、迅速に提供することである。したがって、クライエント生活援助システムの目標は、そのシステム関係を構成する構造的論理性にあるのではなく、むしろ実践目標に適合した情報を、(1) 制御(情報の管理と活用), (2) 記録(情報の系統的記録と保存), (3) 処理(情報の計算処理), (4) 連絡(情報処理結果の伝達), (5) 移動(情報処理結果の終了、送致、継続、中止)させる過程としての作業にある。

しかし、誤解があってはならないのだが、実践は、クライエントとソーシャル・ワーカーとの協同作業の上に成り立つ人間的な活動であって、コンピュータがそれに代って仕事をし、機能するわけではない。人間が、勘と経験で処理してきた情報を、コンピュータによって、想定できる状況や場面に対応させ、広範に、科学的、専門的に、しかも迅速、正確かつ適正に処理・入手しようとする作業過程にすぎない。だが、このシステム化したコンピュータのもつ情報処理能力は、一度プログラムを作成すれば、あとはデータの入力だけで、瞬時に情報処理結果を提供してくれるわけで、この処理能力は、人知の及ぶところではない。そして、この能力を活用して実践を科学化するのが、ソーシャル・ワーカーの専門性に他ならない。

## 5. 8 援助システム構造の特性

さて次に、クライエント生活援助システム構想の中心点である『8援助システム構造』に、少し言及しておかなければならぬ。この援助システム構造は、元々7構造でパイロット研究をしてきた結果<sup>(注16)</sup>を、さらに修正展開<sup>(注17)</sup>したものであるが、これを再度精神障害者モデルに訂正したのが、第一表である。特に前回までは、8構造を基礎的なものから順次配列をしていたが、今回は、情報処理としてのシミュレーション過程に対応させて、配列順序を次のように再編成している。

(1) 目標（生活態度）、(2) 効果（援助効果）、(3) 属性（基礎的特性）、(4) 財政（生計の基礎的条件）、(5) 制度（社会資源状況）、(6) 組織（社会生活関係）、(7) 方法（課題解決方法）、(8) 展開（方法展開の評価）がそれである。

その後、二度にわたるパイロット調査を通じて、表示、内容などの訂正や再編をしてきたが、その部分を、少し説明しておかねばならない。まず、第2の『効果』構造は、従来機能として、つまり実践の機能特性を課題にする構造として分類表示してきた部分であるが、システム特性を構造化する発想とはいへ、構造と機能という科学方法論の二大分類方法との混同と、誤解される恐れもあって、効果という表現を用いることにした。そして、それを構成する指標内容に、クライエント・家族・援助機関・社会資源ネットワークの機能を、効果として表示・構成することにした。

第4の『財政』構造には、職業指標の内容に、主婦や学生などの無職・未就職者への指標を挿入して、職業と家庭内での地位指標を設定することにした。

第5の『制度』構造の補足説明部分については、生活規範という表現を、社会資源状況に変更し、内容についても、趣味・余暇指標を縮小して、自己資源の状況指標を設定し、その中に内包させることにした。

第6の『組織』構造については、職場・学校などの組織的環境指標が、精神障害者の実態に適合しないことから、割愛して、ソーシャル・ワーカー指標を設定し、ソーシャル・ワーカーとの組織的交流を評価することにした。

とにした。

第8の『展開』構造については、クライエント側の課題としてのソーシャル・ワーカーへの接近指標を割愛し、ソーシャル・ワーカーの自己評価指標を設定することにした。その理由は、課題の設定指標の中に十分クライエント側の課題が、指標として内包されていると考えられるからである。

次に、第一図のクライエント生活援助システムとその階層性から理解できるように、この発想の中心は、階層の第3段階である援助システム構造から、出発しているといつてもよい。下位階層システムは、主にその各構造の説明概念、上位階層システムは、その各構造の特性概念といえるであろう。しかし、システム関係とは、本来階層間、階層内において不可欠な結合関係を通じて均衡を維持し、循環するところにある。このような援助システム構造を中心とした視点は、筆者の意図するところではあるが、システム関係は、その意図を汲んで機能するわけではなく、各階層の内外で所与の機能を忠実に遂行するにすぎない。したがって、この意図的な援助システム構造を中心とした視点は、まさにソーシャル・ワーカーによるシステム関係を評価する専門的アセスメントの課題だといえよう。

そこで、システム関係に対する意図的な期待を反映して、第1、第2段階の因子と指標という下位階層との関係から、この焦点である援助システム構造の内容は、因子・指標を通じて、その特徴を詳細に説明するような構成関係になっている。しかし、他方では、因子が指標内容を規定し、指標が構造特性を規定するという視点が、成り立たないわけでもない。システム関係という生態的視点は、事実関係を実体に則して表示するわけで、それを評価するのは、繰り返すようだが、実践行為者の専門性に他ならない。

さらに上位階層との関係では、援助システム構造の特性が、類型化されうるようになっている。一つの類型化は、ソーシャル・ワーク実践の構成要素と対比して考察できるが、人間が生活する意味を問う価値構造、事実認識する知識構造、思想を具体化した方策構造と、目標を実現する活動としての実践方法構造の4類型である。このクライエント生活援助システムの8構造は、このような4構造特性に代表される特性を内包し

ている。

幾度も言及しているように、システムとは、ある実体の成り立つ構造と構造、その結合がもたらす機能と、さらにその結合関係が、時系列変化をしながら、実体の均衡ある存立を維持する循環過程の三要素から構成されている。ソーシャル・ワーク実践が、目標にするクライエントの生活も、このようなシステム関係で構成されていることに異論をはさむ余地はないが、そこで、ソーシャル・ワーク実践といわれる活動は、クライエントをめぐる生活のシステム関係を把握するだけでは、不十分であるといわねばならない。クライエントの生活を『援助』することをめぐるシステム関係の展開をしなければならないからである。ここに人間の生活という生態的実体をとらえるため、クライエント生活援助システムという多元的範疇で類型化されたシステム的発想が、登場することになる。

第一表と第一図を照合しながら、それらの内容を検討すると、8援助システム構造の中でも目標・効果構造は、クライエント・システムをめぐる『価値』を扱う構造として類型化されることになる。価値の課題を構造として類型化することには、難問が山積しているといわねばならない。すなわち、価値という実体が、構造という部分から成り立つ分析的発想に馴染まないこと、また人間のもつ多様な価値観の全体像を、個々の特性に則して類型化することが不可能であることなどから、価値の特性は、非類型化にあるともいえようが、あえて個人の基本的な生活態度と、援助活動を通じた実効が、生活の中に具現化した変容状況を効果(機能)として、いくらかでも価値を相対的に表示しようとする試みが、これである。その一つは、目標構造としての生活態度を、躰・信条、慣習・文化、自己意識、社会意識の4指標で、クライエントの特性を類型化してみようということ、もう一つは、効果構造を、クライエント、家族、援助機関、社会資源ネットワークの4指標で、機能やその変容として価値の課題を構造化してみようとする試みで、理念的・抽象的範疇からなる態度や意味への考察を構造的に類型化したものである。

次に、クライエントの生活諸実態をシステムとして事実認識するためには、クライエントをめぐる情報としての『知識』を収集することが必要である。そのために属性構造として、個別的特性、パーソナリティ、

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

心身の健康、問題の概要などの4指標で、クライエントとそれをめぐる状況理解をすること、そしてさらに、生計の基礎的条件である財政構造を、収入・支出、経済感覚、職業・家庭、生活状況の4指標で具体的に把握しようとしている。これは、日常生活をめぐる基礎的な事実関係の、その認識も比較的容易な、具体的範疇からなる情報の構造的類型化である。

つづいて、福祉への思想と国家・社会の現実を具体化した制度としての社会福祉は、『方策』である社会福祉諸制度のシステムとして存在している。これは一方で、社会資源ともいえる制度構造つまりクライエントの生活が、成り立つためにどのような方策があるのかを、個人の生活、自己資源、援助機関の状況、行政施策の4指標でとらえ、他方で、クライエントの生活の基盤である社会生活関係としての組織構造を、家族、友人・近隣、ソーシャル・ワーカー、援助機関の人びとの4指標でとらえ、制度とそれが機能する生活関係を構造化している。個人の生活や国家・社会の現実から、社会福祉をめぐる微視的・巨視的な論理的、制度的範疇からなる構造の類型化である。

そして今一つ、『実践方法』といわれる実践活動的な特性をもつ構造であるが、その一つが、方法構造で、これはクライエント、家族、ソーシャル・ワーカー、援助施策などの指標からなる実践に参加する行為者のもつ方法構造である。それともう一つは、展開構造と分類されるもので、やはり方法構造と同じく、クライエント、家族、ソーシャル・ワーカー、援助施策の4指標から、方法の展開過程を評価しようとする構造である。これらは、前述の三特性とは異なり、動的、関係的、機能的範疇から、構造の類型化をしたものである。

さてこれらの実践の4構成要素的構造特性は、さらに二大別することが可能である。第一図にあるごとく、それは、システムの特性から構造を大別することである。価値構造や知識構造は、実践の基礎をなす基礎的構造と考えられるし、さらに方策構造や実践方法構造は、基礎的構造に対して実践的構造そのものである。そして、これらの諸特性は、システム構造のコンステレーションに収斂され、クライエントの生活援助システムという統合的全体性 holism でもって表現されることになる。

システムとは、生態に迫る科学的方法論の一つである。そのためには、

このようなクライエントの生活を援助するという現実から、その実体の特性をよりよく把握できるアプローチを模索しなければならない。その帰結が、8 援助システム構造である。幾度も証明することになるが、この8構造が、実践研究の出発点であって、これらの関係がもたらす機能、その時系列変化が、システム的考察の基本である。したがって、8構造の理論的な分類・配列、構造分析や論理性、妥当性が主たる目的ではない。クライエントの生活実体が、システム的発想に求めている統合的全体性という視点は、このような現実に則した多元的な思考方法によって、はじめて幾分なりとも解明できるものである。

## 6. 援助過程への情報処理方法

ソーシャル・ワーク実践の科学的専門化を目指し、それへのアプローチをコンピュータによる情報処理方法の活用を通じて可能にしようと考察を継続してきた。そのための基礎理論や発想、方法の概要は、機会あるごとに紹介もしてきたが、特に本論考にて、その一応のまとめをしてきたつもりである。

次に、本考察の中心課題であるソーシャル・ワーク実践過程への情報処理方法と、その意義について言及しなければならない。クライエント生活援助システムのコンステレーション図は、クライエントと環境システムをめぐる構造と機能、過程が、展開される全体像を容易に想起させてはくれるが、この図の第一義的目標は、その構造と構造関係（機能が発現する前提条件）を明確にすることであって、システム関係図とはいえない、その特性を多面的、かつ合目的的に表示してくれるものではない。したがって正確には、これはあくまでシステム関係の構造図である。

なぜこれほど構造が、重視されるのか。それは、機能・過程が、軽視されていることを意味するものではなく、前述の8援助システム構造の解説にもあったごとく、システム構造が、まずシステム的発想の基点になるということである。それは、システムという生態概念が、構造から考察を開始し、機能、過程と思考を深化させていく手順に、研究方法としての論理性があると考えられるからである。

さてこの構造図から、実際に機能が、システム関係の中でどのように

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

発現し、さらに各構造に波及していくのか。そして、その機能をどのように観察し、理解・把握することが可能なのか。これまた大きな課題である。抽象化されているとはいえ、この構造図にみられる具体的、可視的な構造と構造関係に対して、機能とは、まったく不可視的で、抽象的な質の課題である。そこで、この概念を計数化することによって、機能といわれるものの実体を相対化してとらえようとするものである。

それは、第二表の情報処理のための入力調査票のように、因子構造を5段階で評価することを通じて、処理されたデータが、指標構造や援助・システム構造の特性を量的、質的に表示するシミュレーション・プログラムによって可能になる。まず基本的には、同位階層内の4因子単位構造が、結合してプログラム処理され、指標構造の特性やその機能の程度を、数値として形成・表示することになり、つづいて指標構造が、統合されプログラム処理され、援助システム構造へと収斂されていく。ここで構造関係の特性と、同時に数値として、その機能が相対的に表示されることになる。つまり、各因子、指標、システム構造と上位へ向かっての情報の処理過程で、それぞれ表示される数値は、因子・指標が、独特な結合関係のもとにプログラム処理された結果としての機能を相対的に意味していることになる。

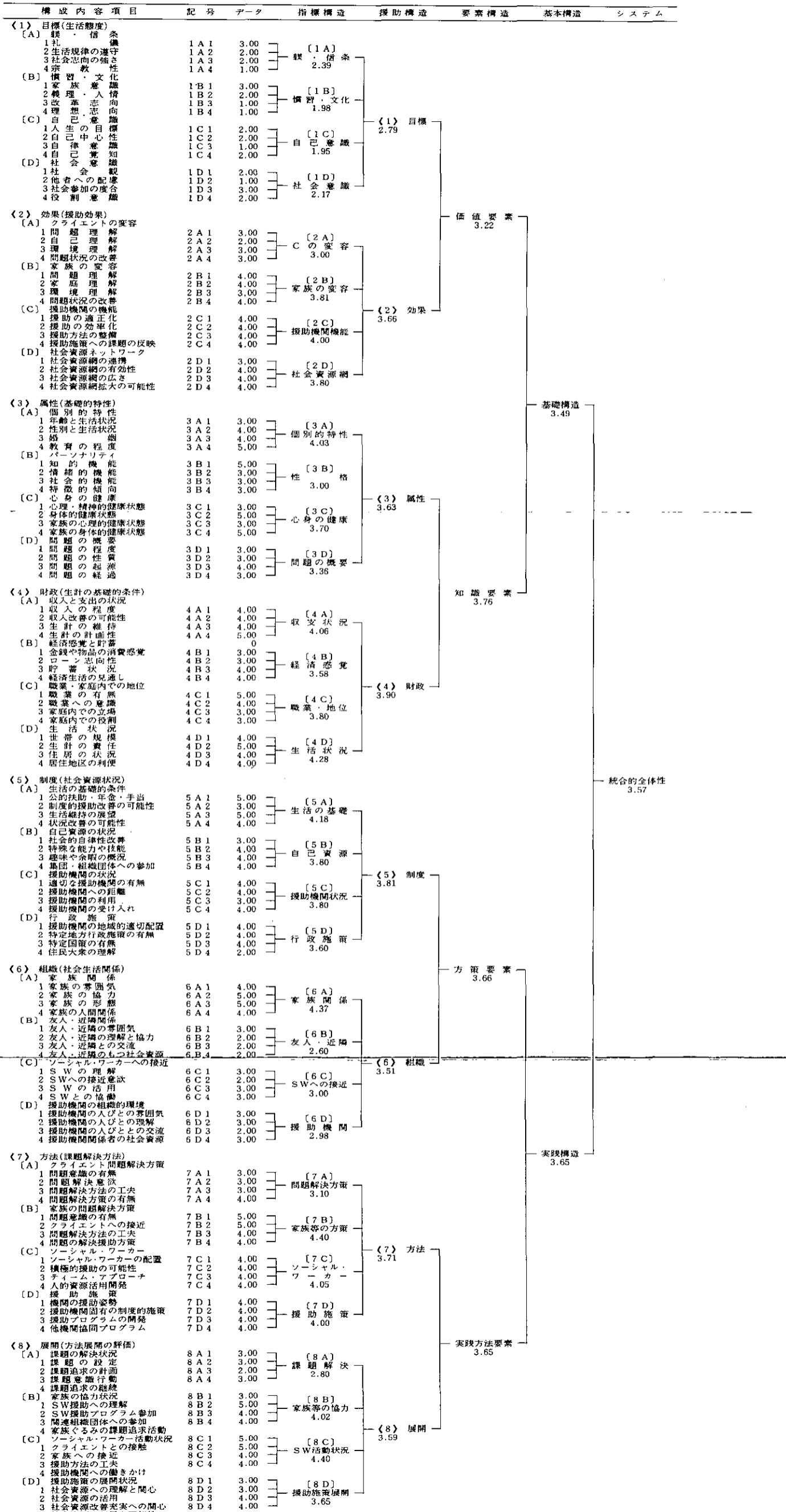
第二図は、シミュレーション・プログラムで情報処理した結果の一例を示したものである。システムを通じて情報処理されてきたデータの構造関係と、その数値が、構造関係のもたらす機能を、相対化して表示していることが理解できるであろう。いずれこの情報処理結果を、相対化した数値で表示するだけではなく、色彩を用いたグラフィック方法で可視的に表示しようと考えている。

そこで次に、情報処理方法としてのシミュレーションと、そのプログラムについて解説をしておかねばならない。シミュレーションsimulationの語源は、ラテン語からきており、「まねる」「ふりをする」という意味である。『現実の世界では、実際に物が存在し、それが時間の経過とともに変化したり、外界に影響を及ぼしたりする。これを現象と呼んでいる。現象のものまねを行なうには、まず現存する物と、それが時間の経過とともにどのように変化するかという変化の法則を確定しなければならない。このように物とその変化の法則を定め表現するものをモデルと呼ん

でいる。…通常モデルに対応してにせの時間を考え、「このにせの時間の経過に伴ってモデルがどのように変遷するかを見る。つまり現象のものまねであるが、これをシミュレーションと呼ぶ」<sup>(注18)</sup>。「シミュレーションというのは、実際のものを、その外見とか、あるいはその運動・変化などを「似せたもの」でおきかえることである」<sup>(注19)</sup>。あるいは「シミュレーションは、その名のように現象を「真似ること」「模擬すること」である」<sup>(注20)</sup>。人間の生活をモデルとしてシステム化し、そこに特殊なクライエントの生活状況データを挿入して、クライエントの生活システムの変容状況を現実に近い似せた状態で、統合的に把握しようとすることがある。

再び第二図に目を移すと、指標やシステム構造の下にある数値は、ソーシャル・ワーカーが、5段階(1. 悪い 2. やや悪い 3. 普通 4. やや良い 5. 良い)で評価した因子を基本データに、各階層で積み上げられた結果の平均値を表示したものである。しかし、生活援助システム・シミュレーションは、因子構造の上位階層へ向けての単純な累積平均ではない。第三表、第四表、第五表、第六表が、それらを示しているように、例えば第三表の価値要素構造のシミュレーション・プログラム概要から、8援助システム構造としての目標構造は、1 A：軀・信条、1 B：慣習・文化、1 C：自己意識、1 D：社会意識の4指標構造からのみなり立つのではなく、1 E：家族意識に集約される指標群(2 B：家族の変容 3 B：パーソナリティ 6 A：家族関係 7 B：家族の問題解決方策 8 B：家族の協力状況)である5指標、1 F：問題解決態度と分類できる9指標からなる指標群と、1 G：生活・財政の姿勢と分類できる5指標からなる指標群の、合計7指標の平均値から構成されている。特に基本的な4指標構造に対して、残りの3指標群構造(合計16指標)は、目標構造の構成ウェイトにおいて、4対3の重みをもって目標構造を補足していることになる。それはさらに、下位構造としての因子のもの、8援助システム構造に対する構成ウェイトの比重にいうまでもなく運動している。

**クライエント生活援助システムその構成及び内容  
シミュレーション モデルA**



## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

### シミュレーション・プログラム概要

#### (1) 値値要素構造

クライエント援助システム指標 構成因子構造	クライエント援助システム 指標構造	クライエント援助 システム構造	実践構成 要素構造
1A 総・信条: 1A1 1A2 1A3 1A4 2Aa 直接的因子: 1B1 1B2 1C3 1D4 3B3 4C4 2Ab 間接的因子: 2B2 4C1 6A2 6A4	1A 総・信条 1B 慣習・文化 1C 自己意識 1D 社会意識		
1B 慣習・文化: 1B1 1B2 1B3 1B4 1B 環境的因子: 1A1 1A2 1D4 4C4 6A1 6A4 6B1 6D1	1E 家族意識: 2B 6A 7B 8B 1F 問題解決意識: 3B 6C 7A 8A 1G 生活・財政姿勢: 4A 4B 4C 5A	(1) 目標 (生活態度)	
1C 自己意識: 1C1 1C2 1C3 1C4 1Ca 補足的因子: 1B1 3B1 5B1 7A1			
1D 社会意識: 1D1 1D2 1D3 1D4 1Dd 補足的因子: 1A3 4C2 5B4 6B3 6C4 6D3	2A クライエントの変容 2Aa 内的因子: 3B1 3B2 3B3 3C1 3D1 4C1 5B1 6C2 7A2 8A3 2Ab 外的因子: 2B4 2C3 2D2 4A2 5A4 6A2 6B2 6D2 7C2 7C3 7D2 7D3 8B4 8C3		価値
2B 家族の変容: 2B1 2B2 2B3 2B4 2Ba 内的因子: 2A4 3C3 3D1 6A1 6A2 6A4 7B4 8B4 2Bb 外的因子: 2C3 2D2 4A2 5A4 7C2 7D3 8C2 8C3	2E 属性的機能: 3A 3C 4A 4C 2F 方法追求機能: 7A 7B 8A 8B 2G 環境的援助機能: 6B 6D 7C 8C	(2) 効果 (援助効果)	
2C 援助機関の機能: 3C1 3C2 3C3 3C4 2Ca 補足的因子: 2D4 7C4 7D1 7D2 7D3 7D4			
2D 社会資源網: 3D1 3D2 3D3 3D4 2Dd 補足的因子: 5D1 5D2 5D3 7C2 7C3 7C4 7D1 7D2 7D3 7D4			

第三表

#### (2) 知識要素構造

クライエント援助システム指標 構成因子構造	クライエント援助システム 指標構造	クライエント援助 システム構造	実践構成 要素構造
3A 個別の特性: 3A1 3A2 3A3 3A4 3Aa 補足的因子: 3C1 3C2 3D1 4A1 4C1 4C3 5A1 6A3	3A 個別の特性 3B パーソナリティ: 3B1 3B2 3B3 3B4		
3B 内的因子: 1C2 1C3 1C4 2A2 7A2 8A3 3Bb 外的因子: 1A3 1D2 6B3 6C1 6C2 6D3	3C 心身の健康 3D 問題の概要		
3C 補足的因子: 3C1 3C2 3C3 3C4 3Ca 心身の健康: 1C2 2A1 2A2 2A3 3D1 3D2 6B3 6D3	3E 追加基礎特性: 4A 4C 5A 5B 6A	(3) 属性 (基礎的特性)	
3D 問題の概要: 3D1 3D2 3D3 3D4 3Db 心理的原因: 2A1 2A2 2A3 3C1 3C2 7A1 3Dc 社会的原因: 4A1 4C1 4C3 4C4 5A3 5A4			知識
4A 収支状況: 4A1 4A2 4A3 4A4 4Aa 個別の因子: 3A1 3C1 3C2 3D1 4B1 4B2 4C4 5B2 4Ab 制度的因子: 2C4 2D1 2D2 2D4 4C1 5A1 5A2 2D2	4A 収入と支出の状況 4B 経済感覚と貯蓄 4C 職業・家庭内での地位 4D 生活状況		
4B 経済感覚: 4B1 4B2 4B3 4B4 4Bb 補足的因子: 1C3 4A2 4A3 4A4 4D2 5A3 5A4 5B1	4E 生計の諸条件: 3A 3C 3D 5A 4F 生計の制度的条件: 2D 5A 5B 5D	(4) 財政 (生計の基礎条件)	
4C 職業・地位: 4C1 4C2 4C3 4C4 4Ca 補足的因子: 3A1 3A2 3A3 3A4 3C1 3C2 3D1 4D2			
4D 生活状況: 4D1 4D2 4D3 4D4 4Dd 補足的因子: 4A1 4A3 4C1 5A1 5A2 5A3 5A4 6A3			

第四表

# 北 星 論 集(文) 第23号

## (3) 方策要素構造

クライエント援助システム指標 構 成 因 子 構 造	クライエント援助システム 指 標 構 造	クライエント援助 シス テム構 造	実践構成 要 素 構 造
5 A 生活の基礎的条件:5A1 5A2 5A3 5A4 5Aa 準足の因子:3A1 3A2 3A3 3C1 3C2 3D1 4A1 4C1	5A 生活の基礎的条件 5B 自己資源の状況 5C 援助機関の状況 5D 行政施策		
5 B 自己資源:5B1 5B2 5B3 5B4 5Ba 準足の因子:3A1 3A2 3A3 3A4 4A1 4C1 5A1 6A2 6B4 6D4	5E 準助の援助制度:6B 6D 7B 8B 5F 制度の方策:2C 2D 7C 7D	(5) 制 度	(社会資源状況)
5 C 援助機関:5C1 5C2 5C3 5C4 5Ca 準足の因子:2C1 2C2 2C3 2C4 5D1 5D2 7D1 7D2 7D3 8C4			
5 D 行政施策:5D1 5D2 5D3 5D4 5Da 準足の因子:2C4 2D3 4D4 5C1 7D2 7D3 7D4 8D3			
6 A 家族関係:6A1 6A2 6A3 6A4 6Aa 準足の因子:1B1 2B1 2B2 2B3 2B4 3C3 3C4 4C3 4C4 7B3 7B4 8B4	6A 家族関係 6B 友人・近隣 6C ソーシャル・ワーカーへの接近 6D 援助機関の組織的環境		
6 B 友人・近隣:6B1 6B2 6B3 6B4 6Ba 準足の因子:5B3 5B4	6E 援助組織:5C 5D 7C 8C 6F 家族状況:2B 4D 7B 8B	(6) 組 織	(社会生活関係)
6 C SWへの接近:6C1 6C2 6C3 6C4 6Ca 準足の因子:5C1 5C2 5C3 5C4 7C1 7C2 7C3 7C4 7D1 8C1			
6 D 援助組織環境:6D1 6D2 6D3 6D4 6Dd 準足の因子:5B4 5C1 5C2 5C3 7C2 7C3 7C4 7D1			

第五表

## (4) 實践方法要素構造

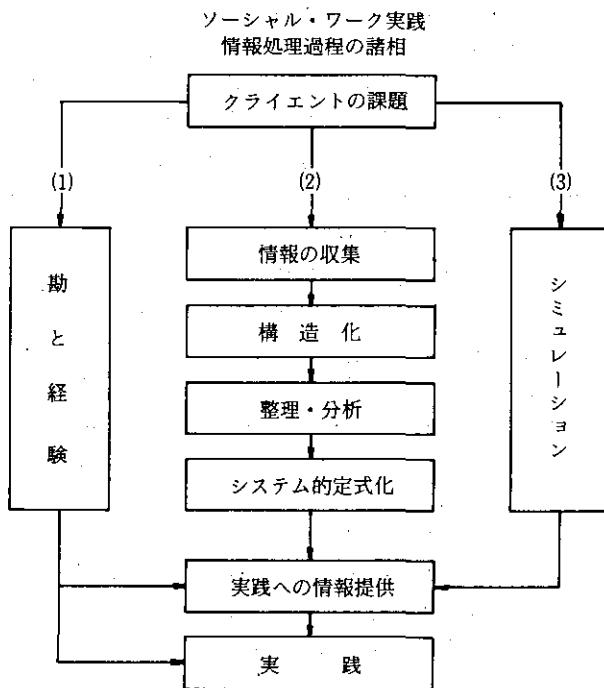
クライエント援助システム指標 構 成 因 子 構 造	クライエント援助システム 指 標 構 造	クライエント援助 シス テム構 造	実践構成 要 素 構 造
7 A 問題解決方策:7A1 7A2 7A3 7A4 7Aa 準足の因子:1C1 1D4 2A1 2A2 2A3 6C1	7A クライエントの問題解決方策 7B 家族問題解決方策 7C ソーシャル・ワーカー 7D 援助機関		
7 B 家族の問題解決方策:7B1 7B2 7B3 7B4 7Bb 準足の因子:2B1 2B2 2B3 6A2 8B1 8B2 8B3 8B4	7E 制度的援助方法:2C 2D 5C 5D 7F 社会的自立性:2A 5B 6C 8A 7G 環境的援助方法:2B 6A 6B 6D	(7) 方 法	(課題解決方法)
7 C ソーシャル・ワーカー:7C1 7C2 7C3 7C4 7Ca 準足の因子:2C1 2C2 2C3 2C4 8C1 8C2 8C3 8C4			
7 D 援助施策:7D1 7D2 7D3 7D4 7Db 準足の因子:2C4 2D3 2D4 5C1 5D1 5D2 5D3 8C4			
8 A 課題解決活動状況:8A1 8A2 8A3 8A4 8Aa 準足の因子:6A2 6B2 6C2 6C3 6C4 6D2 7A2 7A3	8A 課題解決活動状況 8B 家族協力状況 8C ソーシャル・ワーカーの活動状況 8D 援助施策の展開状況		
8 B 家族の協力状況:8B1 8B2 8B3 8B4 8Ba 準足の因子:2B1 2B2 2B3 2B4 3C3 3C4 6A1 6A2 6A4 7B2 7B3 7B4	8E 社会活動:5B 6B 6C 6D	(8) 展 開	(方策展開の評価)
8 C SWの活動状況:8C1 8C2 8C3 8C4 8Ca 準足の因子:2C1 2C2 2C3 2C4 7C1 7C2 7C3 7C4 7D3 7D4			
8 D 援助施策展開状況:8D1 8D2 8D3 8D4 8Db 内的因子:7C1 7C2 7C3 7C4 7D1 7D2 7D3 7D4 8Dd 外的因子:2D1 2D2 2D3 2D4 5C1 5D1 5D2 5D3			

第六表

一方逆に、因子構造を中心とした視点から、このシステム構成を考察すると、128因子は、それぞれ上位構造の特性を分有する。その各固有の特性を目的にしたがって、システムとして結合させたものが指標である。各因子は32指標の特性をシステムとして構成しているが、しかしそれは、算術級数的な収斂構成ではなく、つまり一つの因子が、その固有の特性から、一指標の構成因子になるだけではなく、複数の指標の構成因子として、指標の目標に対応した特性の内包比に応じ、ウェイト付けされてシステム構成することになる。その構成のシステム関係を、内容から分類・整理したのが、シミュレーション・プログラム概要表である。これらの表から、因子構造と指標構造の錯綜したシステム的構成関係を、因子記号とその項目のごとく表示できるが、ここでは32指標構造と本論考の中心である8生活援助システム構造とのシステム的構成関係に焦点をおいた考察をすることにした。したがって、これらの背後に、表示のごとく下位構造としての因子の複雑なシステム的構成関係が、指標を構成していることを付言しておかなければならぬ。

クライエントの生活援助システムというシミュレーション・プログラムは、前述したような思想と発想に基づいて、人間の生活という生態をシステムとしてとらえようとするものであり、因子データを入力することによって、生活モデルのシミュレーションが可能になるプログラムである。次に、このシミュレーション・モデルの特徴を簡単にまとめるこことによって、その意義の解説にかえたい。

- (1) 128項目からなる因子データの評価をソーシャル・ワーカーが行なう。
- (2) 評価に客観的基準はなく、したがって、データの統計的処理を通じた客観性に中心点があるのではない。
- (3)しかし、専門家としての一貫性のある判定が前提ではあるが、そのソーシャル・ワーカーの評価するクライエント・システム像が、具体化される。
- (4) そのねらいは、ソーシャル・ワーカー自身の評価するクライエント・システムを、実践活動を通じて今後如何に展開するかについての情報処理と提供である。
- (5) 情報処理過程の科学化と効率化（第三図）である。



第三図

- (6) 情報処理結果が、実践過程の展開を自動的に評価するものではなく、それを如何に過程の局面展開にソーシャル・ワーカーとして活用するかが課題である。
- (7) 情報処理方法を通じて、末端で入力された因子が構造化され、上位階層構造ごとに統合されて機能という意味を具現する。
- (8) それはさらに、同位階層構造と統合されて、上位階層構造に機能する。
- (9) 因子の構造化は、上位階層構造の特性を分有するあらゆる因子を、その固有の特性にしたがって、ウェイト付けして配列してある。
- (10) 因子は、実践の中で必要とされる一連の手順や活動を網羅している。

- (11) 実践活動の評価記録でもある。
- (12) 実践の思想と目的を理論的、科学的、専門的、効率的に具体化する一過程的方法である。

このシミュレーション・プログラムを通じて、実践に不可欠な生活状況と、活動としての援助関係の概要が、システム構造で表示されると同時に、その関係のもたらす機能が計数化されて表示され、さらに援助活動の初期・中期・後期（終結）にそれぞれ評価・入力したデータを比較することによって、変容過程を容易に把握することができる。この方法としての情報処理過程を、既成の過程方法と比較して図示すると、第三図のようになる。

さて最後に、ソーシャル・ワーク実践過程における情報処理方法としてのシミュレーション・プログラムの活用について、これからの課題は、その活用方法にある。どのような目的に、何時、情報をどのように評価して活用するかという課題である。これは、まさにソーシャル・ワーカーの専門性以外の何ものでもない。

## 7. おわりに

考察してきたように、このような方法に対して疑問が山積していることは、自覚しているつもりである。一つは、人間の問題に対してこのような方法を用いることへの基本的な疑問、もう一つは、科学方法論からの疑問である。それらに対しては、可能な限り応えてきたつもりである。それらを再検討する一つの試みとして理解していただければ幸いである。

これらの課題に付加して、この考察を今後展開するためにも、さしつけめ

- (1) もっとパイロット調査を継続してシステム構造の実体に適合したモデルを整備すること、
- (2) クライエントの実体（精神障害者、身体障害者、老人、児童など）に対応した各論的モデルの作成をすること、
- (3) マークカード方式の入力などによる方法の簡便化と迅速化をすること、
- (4) 情報処理結果のグラフィック表示を工夫すること、

(5) そして何よりも、最大の課題は、実践活動システム・行政システム・政策策定システムへ向けての過程研究を継続することなどを指摘しておかなければならぬ。

〈付記〉

本論考は、財団法人富士記念財団の社会福祉研究助成金に基づき、北星学園大学ソーシャル・ワーク実践研究会が取り上げてきたテーマ『精神障害者とその家族の生活援助／ソーシャル・ワーク実践システムの展開方法をめぐるシミュレーション・モデルの開発』をまとめたものである。

まだこのシミュレーション・モデルの汎用性をめぐって改良を必要とする課題が山積しているが、一応所期の目的は、達成できたと確信している。富士記念財団のご芳志とご理解に深甚の謝意を表するとともに、本研究の成果が、何よりも精神障害者の福祉の増進に寄与することを願ってやまない。また本研究のために道内各地で活躍している多数の PSW, MSW諸氏の協力や懇切な助言があったこと、研究会メンバーの方ならぬ努力や支援があったことも忘れることができない。付記して感謝する次第である。

[注]

- (1) 厚生省、『厚生白書』一昭和59年度版一、大蔵省印刷局、昭和59年、序1頁。
- (2) •日本社会福祉学会 第27回大会(1979)、自由研究報告その1、『ソーシャル・ワークにおけるアセスメントの課題』、発表要旨及びレジュメ。
- 日本社会福祉学会 第28回大会(1980)、自由研究報告その2、『ソーシャル・ワークにおけるアセスメント過程の研究』、発表要旨及びレジュメ。
- 日本社会福祉学会 第29回大会(1981)、自由研究報告その3、『ソーシャル・ワーク実践過程の研究—特にプランニング過程の検討をめぐって—』、発表要旨及びレジュメ。
- 日本社会福祉学会 第30回大会(1982)、自由研究報告その4、『ソーシャル・ワーク過程の分析とそのシステム』、発表要旨及びレジュメ。
- 日本社会福祉学会 第31回大会(1983)、自由研究報告その5、『ソー

## ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義

- シャル・ワーク実践システムとプロセスの局面展開一特にクライエント・システムのアセスメント』, 発表要旨及びレジュメ。
- ・日本社会福祉学会 第32回大会(1984), 自由研究報告その6, 『ソーシャル・ワーク実践過程におけるシステム展開の方法』, 発表要旨及びレジュメ。
- ・日本社会福祉学会 第33回大会(1985), 自由研究報告その7, 『ソーシャル・ワーク実践の情報処理システムとそのシミュレーション・モデル』, 発表要旨及びレジュメ。
- (3) • 拙稿, 『ソーシャル・ワーク実践システムとプロセス展開』, 北星論集, 第20号, 1982年。
- 拙稿, 『ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント』, 北星論集, 第21号, 1983年。
- 拙稿, 『ソーシャル・ワーク実践をめぐるシステム思考とその方法』, 北星論集, 第22号, 1984年。
- 拙稿, 『社会福祉実践の過程展開と方法・技術』, 仲村優一・小松源助編, 『社会福祉実践の方法と技術』, 講座社会福祉5, 有斐閣, 1984年。
- 太田義弘・佐藤豊道編著, 『ソーシャル・ワーク/過程とその展開』, 海声社, 1984年。
- (4) 同書, 2—14頁。
- (5) 同書, 66—72頁。
- (6) 拙稿, 北星論集, 第22号, 1984年。
- (7) S. Minuchin, *Families and Family Therapy*, Harvard University Press, 1974.
- (8) M. Bowen, *Family Therapy in Clinical Practice*, Aronson, 1978.
- (9) P. Watzlawick, J. Beavin and D. Jackson, *Pragmatics of Human Communication; A study of Interaction Patterns, Pathologies and Pradoxes*, W. W. Norton, 1967.
- (10) 前掲北星論集, 第22号, 18頁。
- (11) 太田義弘・佐藤豊道編著, 前掲書, 40頁。
- (12) 同書, 71頁。
- (13) 同書, 72頁。
- (14) 同書, 69頁。
- (15) 同書, 68—72頁。
- (16) 前掲北星論集, 第21号, 98—99頁。

北 星 論 集(文) 第 23 号

- (17) 前掲北星論集, 第22号, 20—21頁。
- (18) 中西俊男, 『コンピュータ シミュレーション』, 近代科学社, 昭和55年, 2—3頁。
- (19) 渡辺茂編, 『システムとシミュレーション』, 共立出版, 昭和56年, 4頁。
- (20) 關根智明・高橋磐郎・若山邦紘著, 『シミュレーション』, 日科技連出版社, 1980年, 1頁。